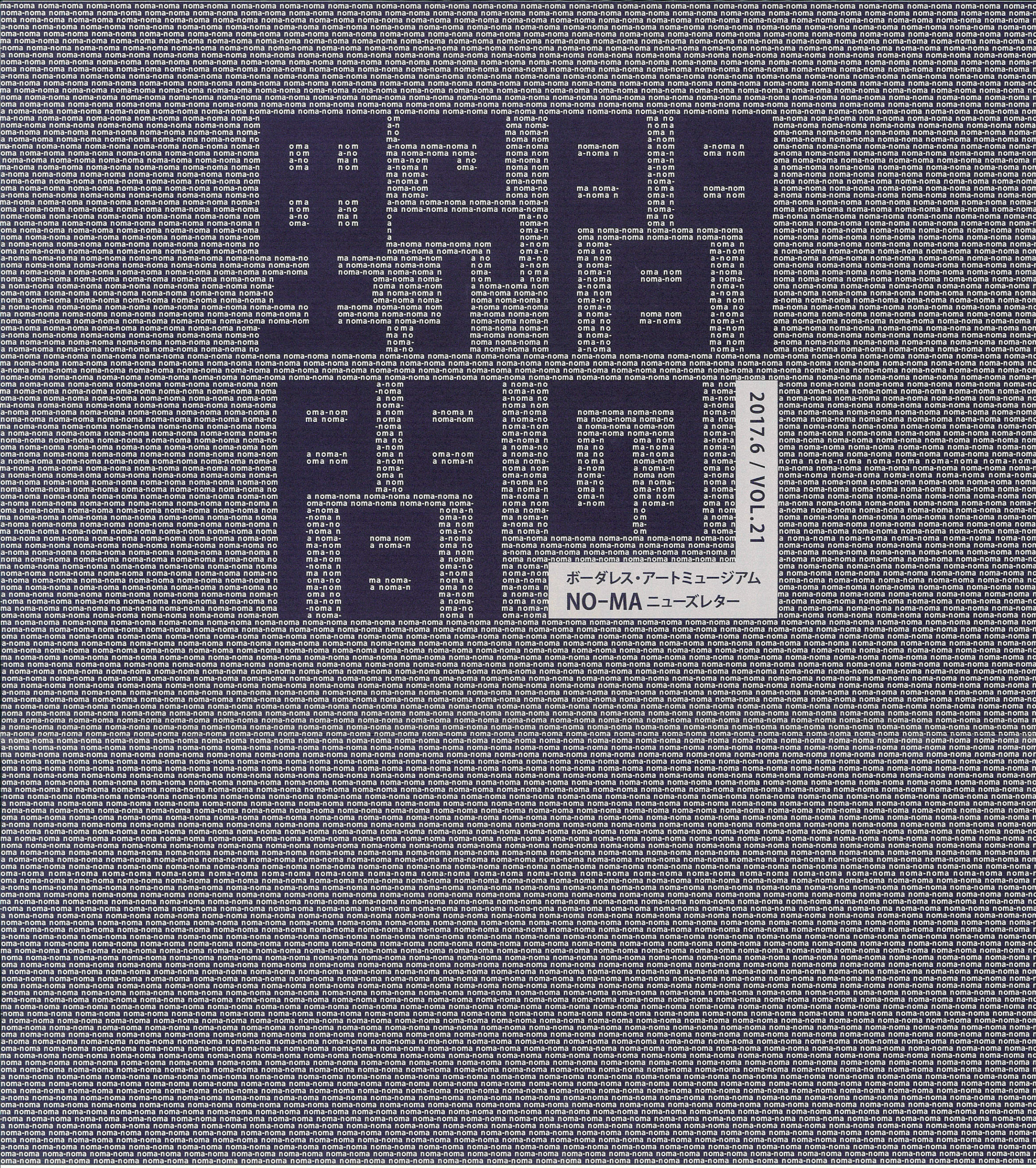


展覧会レポート　**HELLO 開眼**

Topic of NO-MA　2017ジャパン×ナントプロジェクト
日本の障害のある人の文化芸術を海外に発信

ABColumn　**アール・ブリュットを巡るコラム VOL.11**

地域インタビュー　あのひとの近江八幡スタイル
ワコール倶楽部（㈱ワコール社友会）代表幹事
原 正雄 さん

展覧会レポート
Exhibition Report

横井悠（本展学芸員）

第1会場（NO-MA）1階の様子

「HELLO 開眼」展のタイトルにある「開眼」という言葉は、本展で紹介している作者の研ぎ澄まされた表現を形容したものです。作品を鑑賞する側の「開眼」も導いてくれる作品が集結しています。

「開眼」してしまうというと、なにかとてつもないことが身に起こってしまうようですが、とても感覚的な表現に言い換えれば、作品を観たときに、まるで「カーッ！」と雷に撃たれたような衝撃を感じずにはいられない……そのような感覚。本展の制作にあたって私自身、まさにそんな作品との鮮烈な出会いがありました。そして「HELLO 開眼」で紹介している表現は、「作品を鑑賞する」という行いそのものについて考えさせてくれるのではないかと思いました。

私たちが作品を鑑賞するときに、そこになにかメッセージがあると考えて見つめるということはよくあることだと思います。実際、多くの作品が素晴らしいメッセージを発していて、それを受け取って感動することもしばしばです。しかし、この視点に頼りすぎると、「メッセージがあるはず」ということが先入観になって、作品を楽しむ幅がなくなってしまうかもしれません。

ここで、改めて「HELLO 開眼」を思い起こせば、ここに集結した作品はメッセージを感じさせるためだけにつくられたものではないのではないか、とも思えてきます。たとえば、自宅の庭の塀にペットボトルを並べ続ける、喫茶店運営の傍ら神仏を彷彿させる彫像を作り続ける、突如、霊能者として目覚め、頭に流れ出してきた情報を書き続ける……もはや生きるための営みと分けがたく、気の遠くなるほどの時間が費やされた表現の数々です。そこには、誰かにメッセージを伝えるということよりも、自らが信じる価値を貫き通すという意思があると感じます。こうした作品に出合った時、目の前にある表現は自分の理解を超える価値を持つ存在なのかもしれない、というような印象を覚えはしないでしょうか。

私は、自分が、作品に試されているのかもしれないとも思えることがあります。作品を鑑賞するという行いは、鑑賞者が作品を一方的に見つめていると思ってしまいがちですが、それはむしろ反対で、作品が観る人を試している、私たちが見過ごしているものを、「いざ見せん」とばかりに「開眼」を迫っているのかもしれない、そんな風にも思えてきます。

（まとめ：山田創）

第2会場（カネ吉別邸）土間の様子

「HELLO 開眼」
2017年4月29日（土・祝）～7月30日（日）
第1会場：ボーダレス・アートミュージアムNO-MA
［出展者］荒川朋子／一円敏彦／入江早耶／大井康弘／宮川隆
第2会場：カネ吉別邸
［出展者］岩岡保吉／木村賢史／辻村耕司／宮崎甲子男／吉田格也
後援：滋賀県、滋賀県教育委員会、近江八幡市、近江八幡市教育委員会

ノマ Topic of NO-MA トピ

2017ジャパン×ナントプロジェクト 日本の障害のある人の文化芸術を海外に発信

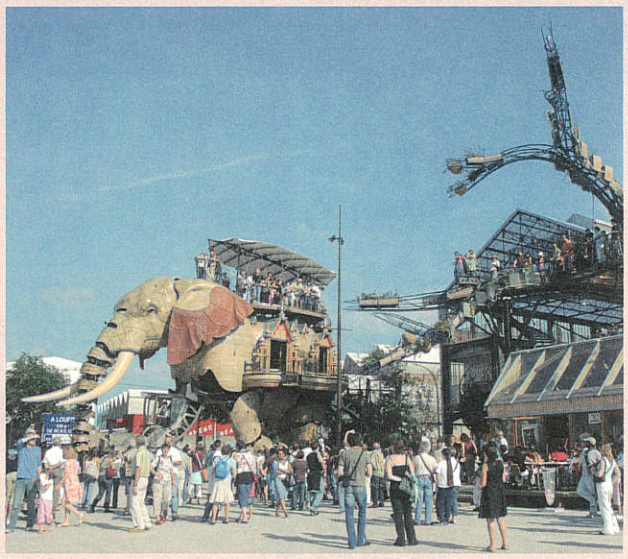
文：木元聖奈（障害者の文化芸術国際交流事業実行委員会事務局）

今年10月21日から、フランス・ナント市で「2017ジャパン×ナントプロジェクト」を開催します。このプロジェクトは、文化庁、障害者の文化芸術国際交流事業実行委員会（全国の社会福祉法人やNPO法人、地方自治体など22の団体で構成）、フランス国立現代芸術センター“リュー・ユニック”、ナント国際会議センター“シテ・デ・コングレ”の主催で、日本の障害のある人の文化芸術をフランス・ナント市から世界に発信するものです。舞台となるナント市は、1980年代末から文化行政で街の輝きを取り戻す政策を推し進めて都市の再生に成功し、世界有数の文化芸術創造都市として、その名を世界に轟かせました。

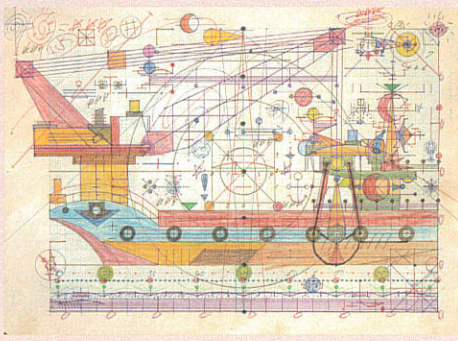
今回のプロジェクトでは、国内の約40名の作者が出展する、日本のアール・ブリュット「KOMOREBI」展に加えて障害者による舞台芸術公演が行われます。公演は、いわみ福祉会・芸能クラブ（島根県）による石見神楽、瑞宝太鼓（長崎県）による和太鼓演奏、湖南ダンスワークショップ（滋賀県）のコンテンポラリーダンス、じゆう劇場（鳥取県）による演劇です。また、展覧会や公演にあわせて、学術的なシンポジウムの開催、バリアフリー映画の上映等、障害者の文化芸術を軸とした企画を展開します。

“シテ・デ・コングレ”のポール・ビヨドー館長は、4月に日本で開催した記者発表で「障害がある人の文化芸術活動に関する日本の取り組みは世界の見本となります。このプロジェクトは、様々な専門家、障害者、アーティストたちが、障害のある人もない人も一緒に作り出す、世界でも初めての試みではないかと考えています。日本のアール・ブリュットや神楽や和太鼓などの日本の代表的な伝統芸能を選び、また、演劇、ダンスなどを取り入れることにしました。今回選んだ各団体の活動は、我々の目的にふさわしいものだと考えています」とコメントされました。

この事業に多くの方々に参加いただくために、全国手をつなぐ育成会連合会の協賛で、10月19日から約一週間の国際交流ツアーが企画されています。詳細は、全国手をつなぐ育成会連合会のホームページをご覧ください。


世界を代表する文化芸術創造都市 フランス・ナント市

日本のアール・ブリュット「KOMOREBI」展
2017年10月21日（土）～2018年1月14日（日）
フランス国際芸術センター「リュー・ユニック」で、日本のアール・ブリュット作家約40名による750点の作品を展示。


山崎健一

障害者による舞台芸術 公演
神楽や太鼓をはじめダンス、演劇など多様な舞台芸術プログラムを実施。
1. 瑞宝太鼓
2. 「じゆう劇場」（鳥の劇場）
3. いわみ福祉会・芸能クラブ／石見神楽
4. 湖南ダンスワークショップ

いわみ福祉会・芸能クラブ

アール・ブリュットを巡る
ABColumn コラム VOL.11

アール・ブリュット
～多様な表現が繋ぐ新たな社会～

KBS京都ラジオ
「Glow ～生きることが光になる～」
【ゲスト】青柳正規（美術史学者）
北山修（精神科医）
【聞き手】野澤和弘（毎日新聞論説委員）
【収録】アメニティーフォーラム21
2017年2月11日（土）於：びわ湖大津プリンスホテル
【放送日時】
第185回 2017年4月7日（金）21:30～21:55
第186回 2017年4月14日（金）21:30～21:55

過去の放送はPodcastでお楽しみいただけます。

文：アサダワタル（「Glow」パーソナリティー）

北山氏はこの数年、アール・ブリュット作品に深い関心を示し、作り手の制作現場や自宅などを訪ね歩いてきた。その上で氏は、作品が生まれて来る背景として、家族などの理解者の存在を強調する。作り手が衝動の赴くまま自由に制作できる環境が守られているからこそ、いま私たちがこうして作品群に出会えるという事実。この理解者のもつ力は、意味が分らない行為や物体に対して意味を決めつけないままに包み込み置いておく力、すなわち「包容力」と表現される。その一方で北山氏は、アール・ブリュットに対して「近代化の行き詰まりに対するもう一つの軸」とか「体制に取って代わる新たな価値」といった物言いにも慎重であるべきだと語る。メタな議論ではあるが、「意味を求めないということの意味づけ」をしてしまうのが人間の性であり、氏が強調したいのは、とにかく「心の胃袋に未消化なまま置いておく」その力をこそ、私たちはアール・ブリュットを機会にして養うべきだ、という点なのだ。

青柳氏は、文化庁長官時代から現在まで様々な地方、とりわけ過疎地の現状を見て回るなかで、若者の地方移住やユニークな地域おこしの例を挙げながら、「心地のよい停滞」という言葉を投げかける。都会の企業人として競争社会の真っただ中にいた人たちが、勝ち組負け組といった既存の価値観から降り、自分らしい居場所を創造していくさまは、氏から言わせれば、アール・ブリュットの作り手たちが周囲を気にすることなくひたすら独自の世界を創造し続けるさまと、どこか共通する点があるのだろう。ちなみに、この青柳氏の「心地のよい停滞」は、北山氏によれば（周囲のことなんて）「知ったこっちゃない」という言葉で表現されていた点も興味深い。

セッション後半は、アール・ブリュット作品の特性に触れる議論が展開された。聞き手の野澤氏は、宮城県の木伏大助氏の作風――昔の邦画のポスターを大量に模写している――に触れ、模倣性という参照点があるゆえに創作の意図がある程度読み取れるとしつつ、一方で滋賀県の澤田真一氏――トゲトゲのついた謎の生物を粘土で生み出す――に対しては全く未知なものとしてどう捉えればいいのか、と問いを投げかける。それに対して北山氏は「（仮に模倣だとしても）その方の作った作品はすぐにわかる」とし、「そうでなければ、あんなに一貫して同じ作風のものが生まれるわけがない」と強調する。ここで創作における、「オリジナリティ」とは何かという議論へと繋がる。また青柳氏は、正規の美術家が主に技巧面から追求して来た美術史の流れを紹介しながら、アール・ブリュットはそれとは異なる地平から、ただただ膨大な時間と労力を惜しむことなく創作に注いできたことに着目し、そのことが実は昨今の美術で失われつつある原初的な「クオリティ」を担保していると指摘した。また議論は、アール・ブリュットの（カンバスにおける）「空間」の話にも及び、空いているところを埋め尽くそうとするある種の強迫観念は、実は人類が根源的に持っている「空間への恐怖」と言える点を確認しあった。

今回のセッションの醍醐味は、内容はもちろんのこと、二人のやりとりがモノローグから徐々にダイアローグへと距離を縮めていった点だ。北山氏の「意味を求めてはいけない」という冒頭からの投げかけは、意味のやりとりであるトークセッションを進めるうえでは「そもそも論」になりかねない。しかし、青柳氏の多分野から引き出される柔軟な応答が、意味付けしすぎることを軽やかに躱（かわ）していく過程で、とても充実したセッションが紡がれていった。私たちNO-MA関係者もアール・ブリュットをこのように言葉にしていくことと、そのままに置いておくことの絶妙な間合いを見極めながら、弛まぬ活動を続けてゆくことだろう。

地域インタビュー
ohmi-hachiman local interview

あのひとの近江八幡スタイル

“知りたい”という好奇心がつなぐ縁
新たなチャレンジが培うもの

ワコール倶楽部（㈱ワコール社友会）
代表幹事 **原 正雄** 氏

文：高山円（ボランティア担当）

瀟洒（しょうしゃ）ないでたちに、颯爽（さっそう）とした身のこなし、まるで以前からの知り合いのように気さくに声をかけてくださるお人柄。ご自分で作成された掲示板には、毎回展覧会のポスターを貼るほどNO-MAを応援していただいている。

そんな原さんがNO-MAへ関心を持たれたきっかけは、「アール・ブリュット☆アート☆日本」（2014）のボランティア募集から。ワコール社友会でのボランティア活動の立ち上げに関わり、他のボランティア活動についても知りたいと思っていたちょうどその時、募集チラシが手元に届いたのである。

「40年も住んでいながら、あまり観光地以外のことを知らず、住んでいる人との交流が少なかった。お世話になっている地域の人とお会いしたかった」と話す原さんの原動力は、“知りたい”という好奇心かもしれない。

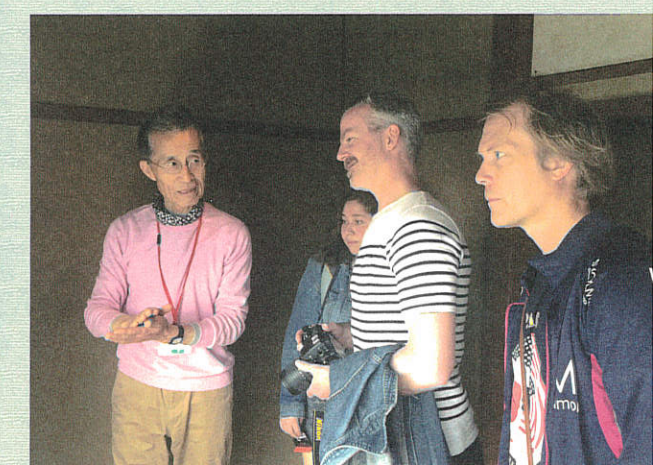
実際、NO-MAでのボランティア活動では、時間がある時はスタッフ同士の歓談となるため、情報交換の場になるそう。原さんの口から他のボランティアさんとの共通点を伺うたびに、そのつながりが垣間見られた。今季、活動いただいている「HELLO 開眼」の会場でも、「原さん！」と嬉しそうな声がかかり、前回ご一緒したボランティアさんたちと再会の場となっていた。

原さんの活躍の場はNO-MAに止まらず、多岐に渡る。近江八幡図書館20周年記念事業や公共設備管理に関する市の委員まで。その中では、ワコールで開いた講座の縁を活かして著名な方の講演会を実現したり、今までの知識を補うため勉強して発言されたりと、内容は違うように見えて、ご自分にも周りにも新しい学びを生み出す場に関わっておられるようだ。

「趣味がないから」という言葉とは裏腹に、大根の栽培を目指して3か月をかけ荒れ地を開墾するなど、その畑で今まで育てられた野菜や果樹の種類は数多い。人参、馬鈴薯、ねぎ、スナップエンドウ、トマトといった聞きなれた野菜から、アーティチョーク、フェンネル、ラムイヤーといった変わり種まで。いちじく、レモン、アーモンド、桃、ブルーベリーなどの果樹を栽培しながらも、「温室でバナナを栽培すること」が野望だそう。完熟する前の青い状態で輸入されるバナナより、自家製は格別美味しいと耳に入ったのだ。

最近では、土づくりにも余念がない。図書館の落ち葉を集めて分けてもらい、畑の一角で発酵させて腐葉土まで作られている。近江八幡のつながりを活かしながら、好奇心や縁の向かうところで新たな試みにチャレンジする。それが原さんのスタイルかもしれない。

◀ 畑に建てられた自作の掲示板



NO-MAでのボランティア活動の様子 ▶

野間の間 noma-noma vol.21
2017年6月 発行：社会福祉法人 グロー 法人本部企画事業部 TEL 0748-46-8100 FAX 0748-46-8228 編集長：はたよしこ デザイン：株式会社タケコマイ

NO-MA関連メディア

<NO-MAグッズのご案内>

NO-MAグッズ
ポストカード、トートバッグ、
クリアファイル、一筆箋

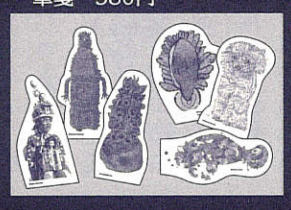
アール・ブリュットの作品画像を用いた一筆箋やトートバッグなど、NO-MAの店頭やホームページからお買い求めいただけます。

ポストカード　150円

トートバッグ　1,000円

クリアファイル　380円

一筆箋　380円



<「HELLO 開眼」展グッズのご案内>

7月30日（日）まで開催中の「HELLO 開眼」展関連のグッズが新登場しました。

展覧会図録　1,500円

出展作品のポストカード　150円

<ラジオ番組のご案内>

アール・ブリュットなど、「福祉」から生まれる様々な表現の可能性について考えるトークラジオ。

Glow ～生きることが光になる～

放送日時：毎週金曜日 21:30－21:55
周 波 数：1143-1485kHz AM, KBS京都Radio

放送エリア外にお住まいの方もぜひPodcastからお聴きください。音声は放送後の翌火曜日、祝日の場合はその翌日に更新します。

NO-MA企画展「HELLO 開眼」関連イベント

展覧会情報（概要）は中面をご覧ください。

講演
「姿なきカミの姿―造形への衝動」

講師：大沼芳幸
（公益財団法人滋賀県文化財保護協会・普及専門員、NPO法人歴史資源開発機構 主任研究員）

滋賀県の歴史・民俗の専門家、大沼芳幸氏による講演。県内に数多ある山岳信仰を題材に、信仰と造形の関係を探ります。

2017年7月8日（土）
13:30～15:00
奥村家住宅（近江八幡市永原町上8）
定員：30名　¥ 展覧会観覧料（要予約）

講演
「神様はどこにいる」

講師：田口ランディ（作家）

社会問題、生、死などをテーマとして、多くの著書を発表する田口ランディ氏に、不可視な世界と私たちとの繋がりについて語っていただきます。

2017年7月22日（土）
13:30～15:00
酒游舘（近江八幡市仲屋町中21）
定員：50名　¥ 展覧会観覧料（要予約）

夏休みお絵かき道場
「わたしの“かみさま”をつくろう」

講師：辻村耕司（写真家、出展者）

実は身近な場所に隠れている“かみさま”を探しましょう。みつけたら写真に撮って自分の世界をつくります。

2017年7月29日（土）
13:00～15:00
奥村家住宅（近江八幡市永原町上8）
定員：20名　¥ 無料（要予約）
対象：中学生以下

修行ワークショップ
「うつし、あらわれ、“行”体験」

“かたち”を描き写す“行”を体験しましょう。心を静かにして筆を運ぶことで、無の境地にたどりつけるかもしれません。

会期中の開館時間
ボーダレス・アートミュージアムNO-MA
¥ 展覧会観覧料（予約不要）

今後の展覧会情報

次回展情報詳細はNO-MAのウェブサイトでお知らせいたします。

NO-MA地域交流事業
「大西暢夫写真展　ここは、わが町」

写真家・映画監督として活躍する大西暢夫の写真展を開催します。東日本大震災を機に被災地である東松島市をはじめ東北沿岸部の風景・人々を撮影した写真や、大西が長年にかけて全国各地のダム湖に沈む集落に暮らす人々を取材した写真を展示します。

2017年8月5日（土）～8月27日（日）
11:00～17:00
¥ 無料

関連企画　8月5日（土）

酒游舘（近江八幡市仲屋町中21）
11:00～13:30
映画「水になった村」上映＆スペシャルトーク
講師：大西暢夫（写真家、映画監督）
大西氏が監督をつとめ、2007年に公開されたドキュメンタリー映画「水になった村」を上映。暮らしに寄り添った映像をぜひご覧ください。
定員：50名　¥ 1,000円（要予約）

14:30～16:00
まちなかトーク
「これからの『わが町』はどうなる？どうできる？」
講師：伊原和人（厚生労働省 年金管理審議官）
宮本武典（キュレーター、山形ビエンナーレプログラムディレクター、東北芸術工科大学准教授）
大西暢夫（写真家、映画監督）
人口減少や高齢化が進むことで社会構造が変化する中、私たちは暮らしの大切な部分をどう守っていけるでしょう？3人の専門家を迎え、これからの「わが町」を考えていきます。
定員：50名　¥ 無料（要予約）

主催：ボーダレス・アートミュージアムNO-MA
社会福祉法人グロー（GLOW）
～生きることが光になる～

NO-MA企画展
「惑星ノマ――PLANET NO-MA」

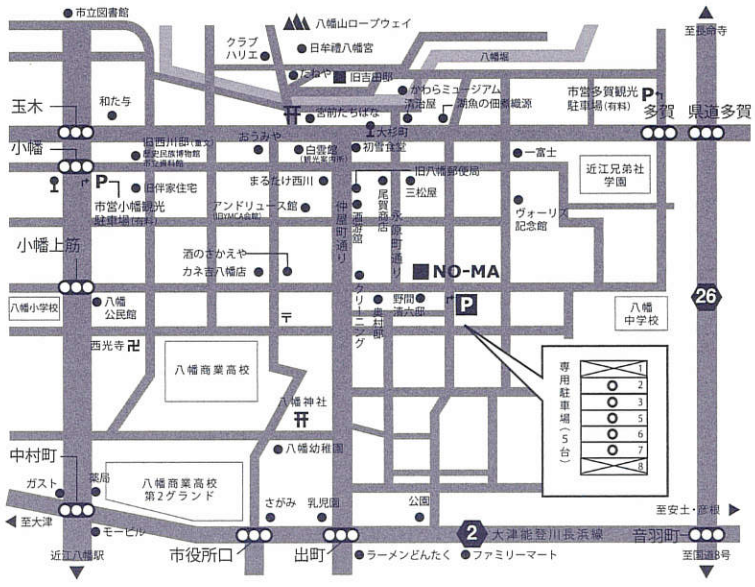
火星に届くほどの空想科学的発想の跳躍力で、独自の航路に舵をとる、6名の表現者たちを紹介する企画展を開催します。地上の世界のあれこれはひとまず傍に置いて、未知なる「惑星ノマ」との遭遇をお楽しみください。

2017年9月2日（土）～11月26日（日）
11:00～17:00
¥ 一般300円（250円）、高大生250円（200円）
中学生以下無料
※（）内は20名以上の団体料金
主催：ボーダレス・アートミュージアムNO-MA
社会福祉法人グロー（GLOW）
～生きることが光になる～

生きることが光になる！ glow 社会福祉法人グロー

これまでボーダレス・アートミュージアムNO-MAを運営してきた「社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団」は、2014年4月「社会福祉法人オープンスペースれがーと」とひとつになり、「社会福祉法人グロー」となりました。

ボーダレス・アートミュージアム NO-MA
Borderless Art Museum NO-MA
滋賀県近江八幡市永原町上16
TEL/FAX 0748-36-5018
休館日：月曜日
（月曜日が祝祭日の場合は翌日休館）
E-mail no-ma@lake.ocn.ne.jp
http://www.no-ma.jp



バス　JR近江八幡駅から近江鉄道バス（長命寺行き）大杉町バス停下車　徒歩約8分
車　名神高速道路・竜王ICより「近江八幡・国道8号」方面へ。国道8号「西横関」右折、「東川町」左折。県道2号「小船木町」右折、「出町」左折。（計約30分）

【編集長はつぶやく】

はたよしこ
ボーダレス・アートミュージアムNO-MA アートディレクター

近年、私が若かった頃の写真を見る事が多い。
娘二人が幼稚園に行ってる頃、我が家は三匹の猫を飼っていた。
岡山県の長閑な田舎で暮らしていた頃は、十匹もいた時もあった。
古い家は、幼稚園の庭くらいの広い家で、友達と隠れんぼをするのが最高の遊びで、猫を抱いて隠れんぼをしていた時の、あの感触が今も忘れられない。
そんな記憶、今でも幸福な気分になる。
「犬派と猫派」という言葉が在るが、「忠実な人と自由奔放な人」という意味だそうだ。
私はどちらかと言えば、猫派だと思う。
子どもの頃の私は恥ずかしがりやで、無口な少女だった。
友達も少なく静かに遊んでいた。
そんな私が、人の前で講演などをしているのが、自分でもよく分からない。
人生は不思議だ。
そう思うと、これからも「どんな老人になるのだろうか」と楽しみだ。
NO-MAでは、「快走老人録」という企画展を2回開催した。
既に、私も老人の枠になっているのだと、今更しみじみと感じている。